

社会・関係資本

対談

建築家 安藤 忠雄氏 × 福武 総一郎 名誉顧問

持続可能な 社会のあり方を 世界に問う

ベネッセアートサイト直島の30年が照らす未来

瀬戸内・直島を中心に地域の方々と協働で展開している「ベネッセアートサイト直島」。このプロジェクトに深く関わってきた建築家の安藤忠雄氏とベネッセホールディングス名誉顧問の福武総一郎が活動の意義や今後の展望をテーマに意見を交わしました。

現代アートのある島、その始まりの記憶

福武 直島は、もともと私の父が子どもたちのためにキャンプ場をつくろうとしていた場所でした。それが「さあ、やろう！」となった時に急逝してしまい、東京にいた私が岡山に帰って父の遺志を継ぐことになったわけです。プロジェクトを進めるなかで瀬戸内海や島の人々との関わりを深め、「もっと充実したものをつくりたい」という気持ちが強くなり、縁あって安藤さんの設計事務所にお声がけしました。あれからもう30年以上経つんですね。



福武 総一郎

ベネッセホールディングス 名誉顧問
公益財団法人 福武財団 理事長
瀬戸内国際芸術祭総合プロデューサー

1945年岡山県生まれ。代表取締役社長、会長を歴任。1988年、直島文化村構想を発表。1995年、「よく生きる」を意味する造語「ベネッセ」を取り入れた「ベネッセコーポレーション」へ社名変更。

安藤 最初に「直島に美術館をつくりたい」と言われた時は、本当にびっくりしました。今でこそ世界一の内海などといわれますが、当時の瀬戸内海は、いわば“死んでいた”状態でしたから。工場の出す亜硫酸ガスや不法投棄の廃棄物によって島は荒れ放題で、作物の実りは少ない。アクセスも極めて不便で、島民にも元気がありませんでした。「福武さん、これはちょっと難しいですよ」と何回もお話したのですが、そのたびに「そんなことを言わ



地中美術館

写真：大沢誠一



ベネッセアートサイト直島

「ベネッセアートサイト直島」は、瀬戸内海の直島、豊島、犬島を舞台に、(株)ベネッセホールディングス、(公財)福武財団が展開しているアート活動の総称です。日本の原風景ともいえる瀬戸内の自然や、地域固有の文化のなかに、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所を生み出していく活動を行っています。



安藤 忠雄 氏
建築家

1941年大阪府生まれ。独学で建築を学び、1969年、安藤忠雄建築研究所設立。代表作に「光の教会」「ピューリッツァー美術館」「地中美術館」など。



草間彌生「南瓜」1994
(C) YAYOI KUSAMA

まれている。直島もそうかもしれない、と思ったんです。

福武 私の原動力は、社会に対する「抵抗」でした。大学進学時に上京して以来、40歳になるまで東京で都会暮らしをそれなりに楽しんでいたのですが、直島プロジェクトに関わったこと

ずをお願いします」と説得されて…。だんだん「この情熱に
応えたい」という気になって
いきました。近代の有名な美術
館建築の多くは、クライアント
の強い情熱と勇氣から生

レジスタンス

で考え方が180度変わった。東京に象徴される過度な近代化
や都市化が何をもたらしたのか、ここに来て初めて気付きました。
現代社会はいわば「在るものを壊し、新しいものをつくり続け、
肥大化していく文明」です。そうではなくて、「在るものを活かし、
無いものを創る」—そうした考えに転換していく必要があると考
えるようになったわけです。瀬戸内海は日本の国立公園指定の第1号
エリアです。富士山より早い指定なのです。そういう美しい地域に、
工場をつくり、有害廃棄物を不法投棄して、ハンセン病の方々を
隔離してきた。とんでもないことだと思いました。アーティストなら
その思いを芸術で表現するところ

1987 直島にて第1回キャンプ開催

1992 ベネッセハウス オープン

1998 家プロジェクト 開始

2004 地中美術館 開館

2008 犬島精錬所美術館 開館

2009 イタリア・ヴェネチア、フランス・
パリで展覧会 開催

2010 李禹煥(リウファン)美術館、心臓音の
アーカイブ、ストームハウス、豊島美
術館 開館

瀬戸内国際芸術祭2010 開幕
(以降3年ごとに実施)

2011 20周年イベント 開催

2012 フランス・パリでレクチャー&トーク
イベント 開催

2013 ANDO MUSEUM、豊島横尾館、宮浦
ギャラリー六区 開館

2015 アメリカ・ニューヨークでシンポジウム
開催

2016 豊島八百万ラボ 開館

ささやきの森、針工場 公開

豊島シーウォールハウス 開館

社会・関係資本

でしょうが、私は芸術家ではないので、地域の方々の協力を得ながらそれを直島というキャンパスに描こうと思ったのです。その中心が安藤さんでした。

安藤 「現代美術では人は集まらない」といわれていたのに、現代美術を紹介する施設をつくるという発想も凄いなと思いました。しかもジェームズ・タレルやブルース・ナウマン、ウォルター・デ・マリアといった、ある意味難しい芸術家ばかりを選ぶ福武さんの感性にも感心していました。

福武 原点は父が集めていた国吉康雄という岡山出身の画家なんです。最初は「何だこれ？」と思っていましたが、眺めているうちに一枚の絵に託した画家の思いのようなものを感じ取れるようになりました。それで直島の置かれた状況に合う作品を集めようと思ったのです。ピカソの「ゲルニカ」のように、この場所に合う作品を。それは私の勝手な解釈なのかも知れませんが、それぞれの作品を最もふさわしい環境のなかに置くことでメッセージをより強く発信させたい、と思ったのです。

輝きを放つ島民の目——直島メソッド

安藤 美術館のオープン当初は年間来館者が3万人くらいで「こんなものかな」と思っていました。島民も初めは「あまり人が来るのは嫌だ」なんて言っていたのですが、そのうち7万人、8万人と増えてくると急に元気が出てきて「うどん屋をしようか?」「うちは喫茶店やりたい」「うちは民宿を」とか言い出す人もいて、何より目が輝き始めた。とくにお年寄りたちがどんどん元気になっていくのには驚きました。「ひょっとしたら、上手く

いくんじゃないか?」と、その時思いました。

福武 さまざまな芸術家が制作のために島に滞在して、地元の人たちと交流していきました。その作品を見に来た若い人が「これ、何だろう?」と首をかしげている時に、傍らからお爺さんやお婆さんが出て来て「あんたこれはね、こういう人がつくった作品で、こういう意味があるんだ」と、滔々と説明を始めるわけです。若い人は「なんだ、この島は!」と腰を抜かす。そうしたことをきっかけに自宅の蔵を改修して古い持ち物やコレクションを展示したり、島の歴史や風土について語ったりする元気なお年寄りが増えていったのです。

安藤 以前から私は「リンゴは青い方がいい」と言っているんです。青いリンゴは失敗を恐れない。赤い熟れたリンゴよりも、人は生涯青いリンゴのままの方がいいと。直島の人たちは、赤く熟れてしまったリンゴかなと思っていたのが、ぐっと青くなって積極的になった。「ほー!」と思いましたね。私の人生でも一番くらいの良い出来事でした。世界中の国が地方都市の再生で困っているなかで、直島は再生の一つの見本になると思いますよ。

福武 実際は単純なことなのです。「幸せになるためには、幸せなコミュニティに住む」ということ。宗教ならば「幸せのコミュニティは、あの世にある」と言うけれど、この世にそれをつくりたいと思ったんです。お年寄りも笑顔がいっぱいあふれている、そういう「極楽」を、現代美術を使って生み出そうと。それは意識してやってきたことです。

安藤 なぜ直島が世界から注目されるかという「ここにしかない」場所だから。ここにしかないから、世界中から見に来る。



ここでのプロジェクトが、
「Benesse = よく生きる」
という考えの原点になった

島の人たちの目が輝き、 お年寄りたちがどんどん元気になる。 その変化は本当に驚きだった



こういう考え方を、みんな真似すればいいと思うんです。そうしたら、世界のあちこちに「ここにしかない」場所ができるはずなんです。

福武 「直島の今後の展望は？」とよく聞かれるのですが、企業の事業計画とは違って将来はああして、こうやって、というのは正直ないんです。ただ、今おっしゃったように、日本の他の地方や諸外国で、地域を元気にする一つの手法としてこの直島メソッドを使いたいという話ならば、どんどん紹介していきたいとは思っています。

未来、そして「よく生きる」を考える場所

福武 「Benesse」という社名に変えたのは、直島プロジェクトを進めている時でした。直島の活動があったから、「Benesse=よく生きる」という考えが生まれたとも言えます。その意味で、直島プロジェクトは事業活動と一体なんです。モノや情報やITはいわば資財に過ぎない。一番大事なのが人が「よく生きる」ことなのだ、という考えから新しい事業がどんどん生まれていきました。

安藤 大切なのは「よく生きる」を、自分の頭で考えること。直島はそれができる場所だと思います。直島の美術作品は、ずっと同じ場所に置かれています。そういうパーマネントな美術館には2回は来ないだろうと言われましたが、実際は2回、3回来

る人、毎年来る人もたくさんいます。それは来るたびに違う体験ができるからで、美術作品との対話、自然との対話、風景や地元の人々との対話、いろいろなことが毎回違うわけです。この日本国内でも非常に来にくいような場所に、パリやニューヨークから毎年来る人たちを見ると、みんな「よく生きる」ことを探しているんだなと思います。

福武 企業は経済原理で動いていますが、大事なのは企業活動で生み出した富を社会にどう還元していくのかです。それは単に税金を納めればいい、という話ではなくて、地域や文化の振興について企業は社会的責任を持って、もっとコミットしていくべきだと思っています。金融資本主義的な風潮が世界的に広まるなかでは、誰もが幸せになれる社会など実現するはずもありません。直島プロジェクトは、推進母体である財団が、寄付を募るのではなく、ベネッセの大株主として配当を得て、それによって継続的に活動ができる仕組みをつくり上げていきます。これは私たちの提唱する「公益資本主義」の考えを実践していくための仕組みの一つです。

安藤 企業は「公器」であると私も思います。売上や利益だけでなく、公の存在として社会とどう向き合い、どういう役割を果たしていくか、すべての企業がそれを真剣に考えたら、きっと社会はもっと良くなります。ベネッセの社員の方々も、ぜひ自分でこの直島を体感してほしいですね。体で「よく生きる」を感じないと、本当に人に伝えていくのは難しいですから。